

ジュニア部門 〈母への思いに関する作文〉

中高校生部門 佳作

僕の母

坂井市立春江中学校

道^{みち}岸^{ぎし}佑^{ゆう}太^たさん

〔応募動機及びコメント〕

母への思いの作文で受賞することができ、とてもうれしく思います。まさか受賞するとは思っていませんでした。

これからも母をはじめ家族全員で仲良くしていきたいと思えます。僕を育ててくれたことへの感謝の気持ちを忘れず、精いっぱい親孝行していきたいです。

僕は中学三年生だ。中学三年生といえば、世間一般は反抗期真っただ中だ。僕は、小学校低学年の時は母にもちろんうだうだ言っていたかもしれないが、最近は全く反抗らしいことをした覚えがない。父にも同じだ。もし母に反抗すれば、夕飯が危うくなる危険性が大になり、朝起こしてくれず学校に遅刻する危険性も大になる。でも実際はそれ以前に、ウザいと思うことがないのだ。気まづくなって会話ができなくなる方が嫌だ。普段は口にはしないが、母には感謝することばかりである。なんだか格好良くないような感じであるが、心からの感謝の気持ちが僕を反抗的にさせてくれないのだ。

母は僕の趣味に合わせてくれる。話が合わないことがないのだ。小さい時から一緒に色々な事を覚えてくれた。

僕が恐竜に興味を持ったときは、バリオニクスだの、パキリノサウルスだのエウストレプトスポンディルスだの、凶鑑の隅から隅までマイナーなものも全て一緒に覚えてくれた。マジックに興味を持ったときは、僕のマジックショーを最後まで根気強く見てくれた。マイケル・ジャクソンに興味を持った時は、曲も全部覚えてくれた。最近はAKB48にはまっているが、やはり途方もない数のメンバーや曲を積極的に僕に質問して覚えてくれた。

色々な事に興味を持つようになったのは、本当に母のおかげだと思う。小さい時から色々な事を覚えていくうちに覚えることが大好きになり、今では記憶力には何よりも自信がある。母はここまで計算していたのか、もししていたのなら素晴らしいと思う。

周りの友達がよく「親と話が合わない」と言うのは、自分と笑いの趣味が合わないというもの大きな要因だと思う。友達と喋っているときは楽しく自由でいられるが、親と喋るときは笑いをつくりづらく自分を出せない人が多いようだ。僕はそんなことは全くない。普段友達と喋ると同じような感覚、気軽さで母と喋ることができる。むしろ僕の親は、どんな事でも面白ければ良いというような考えなのだ。友達に少し嫌な

ことをされようが、何か失敗しようが、格好悪いことになろうが、「ウケたんなら、良かったじゃない」と言われる。その強烈な家庭環境のおかげで、僕も同じ考えを持つようになった。だから、話も合うのだろうと思う。

友達の言う「ウザい」はたぶん大半が「うるさい」か「邪魔」だと思う。今思えば、僕の母は居てほしいときに居てくれて、居てほしくないときにうまいこと居ない。例えば、友達が遊びに来たり、真剣に何かをしたりしているときは、存在すら感じさせないくらいうまく消える。でも、暇なときはすぐ喋ってくれる。その加減が絶妙で、自分のことを本当に分かってくれていると感じる。

「うるさい」という面に関しては、母はあまり口うるさく注意しない方だと思う。ガミガミ言うことができない性格なのかもしれない。みんながよく聞くであろう「宿題はやったの」とか「勉強しなさい」とか、一度も聞いたことがない。まあ、僕が宿題も含めて勉強をしつかりやるからだ、それにしても、ガミガミ言わなくても済むように僕を育てたのは母だ。母の将来計算能力は計り知れない。ただ、「早く起きなさい」はよく耳にする。一日に五回耳にしない日はない。早く起きることが僕の一生の課題であるが、どうも母の課題のような気がしてきて、なかなか直せない。せひとも頑張ってほしい。

母自体も僕は人として尊敬している。料理が上手で、パンも作れる。僕が言うのも変だが、若々しいと思う。性格も淑女という感じである。友達にも自慢できるところがたくさんある。

あんまり褒めすぎると「マザコン」呼ばわりされそうで嫌だが、全て本当に僕が思っていることである。友達は母の大切さを知るきっかけになったことというのがあるのかもしれないが、僕は普段から母に感謝せずにはられない。「将来の親孝行、大きいのよろしくね。」と母。そのために、もっと頑張っていただましよう。